

台湾から見た日米中

The Relationship between Taiwan and America, China, and Japan

酒 井 亨

公立小松大学

世界の情勢を読む講座・第3回は「台湾から見た日米中」と題して、2019年5月18日午後、公立小松大学中央キャンパスで開催した。

台湾およびそれをめぐる国際環境は、あまり知られていないこともあって、台湾の地理的な位置や歴史から説き起こした。

台湾は従来の「常識」では中国の延長のようにとらえられることが多いが、生物地理区では旧北区、東洋区、オーストラリア区の三つにまたがり、海洋も東シナ海と南シナ海に面しており、中国大陆、日本、フィリピンなどとの交流が見られた。

そして現在は、二つの異なる歴史観が交錯している。それは戦後中国からやってきた国民党による大中華史観と、1980年代の民主化開始以降に台頭してきた台湾本土主体性史観と呼ばれるものである。そして、後者が時代の流れとともに主流になる趨勢にある。

台湾本土主体性史観によれば、台湾の歴史はオランダ、中国、日本など、台湾の外から支配者がやってきた「外来政権の連続」ととらえられる。言語を異にする族群（エスニックグループ）の対立抗争と、外来政権その他の外部勢力の干渉、さらに異なる族群の通婚などによって、台湾は周囲と異なる独特な多文化・多言語が織りなす混交社会だと主張される。

国共内戦で敗れた中華民国の国民党政権が台湾に逃げこんで支配したことから、台湾は中国の一部や延長のような認識を持っている人はまだ多いが、台湾の歴史や現在の国際関係からは、台湾を中国の延長ではとらえられない側面が多いということである。

ちなみに現在台湾の統治機構は、中華民国政府という名称であるが、中華民国は国際的に承認されていない。台湾の命運に強い影響力を持つ日米政府ともに承認していないためである。とはいえ、日米政府は実質的に台湾との政府間関係を維持しており、台湾にとっても日米、近年ではとくに日本との関係は最も重要な関係となっている。

日本との関係は、歴史的に日本が台湾を殖民支配した歴史もさることながら、地理的に近いことから、地方および民間の様々なレベルで交流関係を有している。

2011年の東日本大震災に対して、台湾では強い同情と関心を引き起こし、世界最大の義援金が

台湾から送られた（250億円を超える）。台湾も日本もプレート境界に位置し、さらに台風が襲来する点で、災害が頻発する。東日本大震災をきっかけとして、日本人も台湾人の日本に対する親近感を認識し、お互いの地震や水害発生のために義援金などの支援を送る間柄になっている。

2019年5月の令和への改元についても、台湾では一連の式典を同時通訳で中継するなど、高い関心を持っている。

石川県は特に台湾との結びつきが深いところである。金沢市出身の八田与一（嘉南大圳）、磯田謙雄（白冷圳）、梅沢捨次郎（ハヤシ百貨）の功績が顕彰されてきたからである。また現在のところあまり知られていないが、小松市出身では言語学者の浅井恵倫（あさい・えりん）、おそらく加賀市出身では警察官として台湾語辞典を編纂した東方孝義がいる。小松市には石川・福井の玄関口である小松空港もあり、小松・台北便は2社あわせて毎日運航しており、これはローカル空港として最多である。

台湾人は「親日」として知られている。その定義に問題はあり、また台湾人の親日の在り方と日本人の期待にはずれも見られるが、台湾人が日本に対して最も親近感を寄せているのは紛れもない事実である。

一方、米国との関係であるが、米国が世界唯一の超大国であり、中国の侵攻に対する抑止力を唯一有していることから、外交・国防上では最も重要な国とされている。

中国との関係はしばしば語られるので、本報告では触れない。

講演では最後に、日米中関係の中での台湾の位置づけと、最近の情勢について触れた。

現在進行中の米中貿易戦争に端を発した米中対立は、「新冷戦」とまで呼ばれ、単なる貿易摩擦ではなく、5Gをめぐる通信インフラの覇権対立や、南太平洋をめぐる米中の軍事的対立の問題となっている。この中では、日米はほぼ一体なものとして行動している。旧来の地政学でいえば、日米という海洋勢力と、中国という大陸勢力との対立という図式となる。その中では、台湾という「小国」は、あくまでも従属変数と考えられている。

ところが、台湾の存在は、日米にとってきわめて大きな意味を持っている。数少ない台湾との国交国の存在が意味を持っている。この講演の時点では、ソロモン諸島との台湾との断交が噂され、実際この9月には断交している。それに対して、米国がソロモン諸島への援助見送りの姿勢を示すなど、台湾援護の姿勢を見せている。台湾と中国の国交は二者択一の「ハルシュタイン原則」がまだ健在である。台湾と国交があれば中国がその国に軍事的に進出できない。逆に台湾との国交は、中国の南太平洋の進出を阻止することができることになる。つまり、太平洋諸国の台湾との関係如何は、米国の安全保障戦略にとって大きな意味を持っているのである。

さらに、「台湾側からみるとより大きな期待が寄せられているのは日本である。日本政府は表面的には何もしていないように見えるものの、水面下では台湾との緊密な関係を保っている。さらに自治体や民間レベルでは台湾にとって最も密接な国は日本なのである。

2020年1月11日には台湾で総統（大統領）選挙が実施される予定である。日米寄りの与党・

民主進歩党（民進党）と、親中野党の中国国民党がほぼ一騎打ちとなり、その帰趨はアジアのパワーバランスおよび日本にとっても大きな意味を持つ。台湾は「小さな国」であるし、日米中の大国関係の中では従属変数かもしれない。だが、台湾を観察することで、アジア太平洋の様々な国際関係、安全保障など、日本人が日ごろ意識しない国際政治の裏側も見えてくるのである。

本稿は、2019年4月13日から7月20日までに行われた全5回分の公開講座「世界の情勢を読む講座」のうち、5月18日の第3回講演「台湾から見た日米中」を、講演者の手によりまとめたものである。